

お茶の時間

歴史的謝罪の賛否

井上 廣司 陸自72

日本は、戦後近隣諸国から歴史的な謝罪を求められ、それに応じて歴代首相が謝罪した。冷戦終了後、世界でも「歴史的謝罪」が散見されるようになった。最近話題なのが、カナダのジャスティン・トルード首相である。2015年11月就任以来、カナダ政府が犯した罪について謝罪を重ねている。

1914年、インド系の移民希望者らの入国を拒否したこと、カナダ東部の先住民族に対する欧米教育を強要したこと、性的少数者を公職追放したこと、1864年先住民族指導者を絞首刑にしたこと、などである。

今年5月には、1939年ナチス・ドイツからの大西洋を横断してきたユダヤ人の受け入れを拒否したことを謝罪することを表明した。入国を拒否された後、250人以上がホロコーストの犠牲になった。トルード首相は、涙ながらに「カナダがユダヤ人907人の亡命を拒否した時、私たちは彼ら自身のみならず、彼らの子孫やコミュニティの期待を裏切った」、「事実を認め、過去から学び、偏見と闘い続ける

ことが我々の責任だ」と訴えた。

トルード首相ではないが、1988年当時の、マルルーニー首相が日系カナダ人への迫害について謝罪し、日系カナダ人の名誉回復と補償を行うことを議会で演説した。

明治初期から始まったカナダへの移住者はバンクーバー周辺に住み、漁業や農業を営んでいたが、第2次世界大戦の開戦に伴い約2万2千人の日系カナダ人は先祖が日本人であるとの理由で財産没収などの人権被害を受けた。

カナダ国内では、トルード首相のこうした謝罪に対して、評価する声と疑問視する声が入り混じっている。

先のユダヤ人受け入れ拒否についても「カナダの歴史の汚点である。謝罪は遅すぎたくらいだ」と評価する一方で戸惑う国民がいるのも事実である。

カナダBBCは「トルード首相は謝罪し過ぎか？」と題した記事を配信し、全国紙グローブ・アンド・メールは社説で「頻繁に申し訳ないと言う人は、実際そう思っていないことが多い」と懸念を表明した。

トルード首相の謝罪は、支持率アップを狙ったものだ」と批判する勢力もあるが、実際は「謝罪によって支持する人が増える一方、離れる人がいる」と指摘されており、来年の選挙に勝てるかどうかは、未知数だ。(6月15日 記)